新吉は先刻から便所へ行きたくて不可ないのだ。

立ち上つた

『まあ好いよ』無想庵は言つた。

『アガンボジョー』

新吉は唸つたのだ。

ヘヤーペンが脱落する程吃驚した文子夫人は笑ひ顔になつた。

合點がいつたのだらうと新吉は思つた。

『あんたが若くないから駄目だ』

文子夫人の肩を抑えるようにした。

薄氣味が惡るくなつたのだらう。

『俥に乘つて停車場まで、さつさとお歸んなさい』と文子夫人は言つた。

土手下の莚戸の便所の中へ驅け込んで、新吉は激しい下痢をした。

俥に乘らずに踏切を越えて、此の前の片岡旅館へ行つた。